

“Another Unfortunate” ——ヴィクトリア朝の廉価既製服業界と その反対運動——

横 山 千 晶

はじめに

環境省が発表した2022年の調査によると、現在、日本の小売業で売られている衣料のうち、98%が海外で生産されている。また、私たちがもう着なくなった衣料のうち、68%は、リサイクルやリユースではなく、可燃ごみや埋め立て用の不燃ごみとして廃棄処分されている¹⁾。

負荷がかかるのは環境に対してだけではない。ものを消費し廃棄することは誰かの労働を消費し、廃棄することである。労働は人の命でもある。2013年4月24日バングラディシユの首都ダッカで縫製工場を擁する8階建てのビル「ラナ・プラザ」が崩壊し、1,100名以上の労働者が死亡した。前日に建物の壁に亀裂が見つかり、事故の危険性が指摘されていたにもかかわらず何の措置も講じられなかった結果、起こるべくして起こった悲劇であった。この工場で作られていたのは、ファストファッションの製品であったことから、間接的に日本の消費者もその事件に関与していたことになり、事故は日本でもマスメディアで大きく取り上げられた。しかし、今となってはこの事件も消費者の間では忘れ去られつつある。当時は世界各地でファストファッションのボイコットが起こったものの、あれからはや10年以上たった今では、環境省のデータを見ると、少なくとも日本では、人々の衣服の消費に対する意識はあまり変わっていないと言えるのだろう。

Fast fashion とは安価に大量生産され、トレンドの動向に合わせて短期間で店頭
に並ぶ商品が回転していく衣料品のことだが、*Oxford English Dictionary* (OED)

による初出は1975年である。しかし、この言葉が日常的に使われるようになったのは、1990年代に入ってからだった。さらに新型コロナウイルス感染症の影響で人々の購買スタイルが大きく変わった結果、通販によるファッションの消費も日常となり、今ではSHEIN, Temu（中国）やASOS（イギリス）のようにeコマースのみで中間業者を経ることなく、安価で消費者に直接製品を届ける企業の進出が目覚ましい。

このようなファストファッションの歴史をさかのぼると、大量消費の時代の到来、つまり19世紀のイギリスに行きつく。本論文は、19世紀イギリスの服飾生産に関わる労働をめぐる、あらためて私たちを取り巻く倫理的消費の在り方との連関について考察する。ヴィクトリア朝のファッションとその消費の状況に関しては、さまざまな研究が発表されており、消費を支えていた生産者の労働環境や賃金体系についても詳しい調査に基づく研究書が出ている²⁾。しかし、服飾生産者の劣悪な労働環境に対して、慈善家たちが具体的にどう取り組んでいたのかについては、いまだに調査の余地がある。

本論文では二つの側面から19世紀の安価な服飾製品の生産に関わる人々の労働環境とその改善に関してのアプローチを試みる。一つは、廉価既製服生産を取り巻く劣悪な労働環境が、文筆や絵画を通して一つのナラティブを作り上げていった様子を追っていく。文学作品では頻繁に取り上げられたこのテーマは、すでにすぐれた研究を生み出している。本論文では、ジャーナリズムに焦点を当て、ノン・フィクションとフィクションが手を携えていった過程を見ていく。その発信者は当事者である女性の服飾生産者ではなく、実際の事件報告から物語を作り出し、自らが当事者を装う男性の文筆家であった。また絵画の世界では流布していた「囚われた女性」のイメージを当事者であるお針子たち（needle women）に重ね合わせることで、物語の主人公に仕立てていった様子を見ていく。世間に広がるこれらのイメージを通じて、「運に見放された（unfortunate）」「墮ちた女性（fallen women）」のキーワードに女性たちがあてはめられていくのである。

2点目では、既製服生産に携わる女性たちの救済実践の具体例を見ていく。貧困ゆえに身を持ち崩さざるを得なかったfallen womenの救済団体に関する研

究の中で、廉価既製服生産の労働環境の改善に取り組んだ具体例に関する調査はいまだ十分に行われているとはいいがたい。本研究では、女性や子供たちの貧困問題に取り組むために立ち上げられた Reformatory and Refuge Union に焦点を当て、メンバーが創設した「廉価既製服業者反対同盟 (Anti-Slop-Shop League)」の活動に焦点を当てて、現代の私たちにも通じる活動の目標を精査していく。

1. 既製服大量生産の時代と「苦汁労働」

デパートメント・ストアは18世紀にイングランドで生まれたと言われる。都市化が進み、人口の都市部への集中と情報化社会の発達の中で、次々と開設されていった百貨店は、消費という行為そのものを変えた。

たとえばフード・ホールが有名なハロッズ百貨店(1834年創業)は食料雑貨店がその前身であるし、リバティ・プリントで有名なりバティ百貨店(1875年創業)は、もともとはオリエンタリズムやジャポニズムの流行を受けて、日本を含む東洋の工芸品・装飾品を扱う店であった。1885年にはインドから職人たちを招いて手仕事の実演を見せるなど、エンタテインメントの要素も多く取り入れたことでも知られている。2018年に閉店したウィットリー百貨店(1863年創業)は反物業。ニューカッスルのバインブリッジ百貨店(1838年創業。2002年にはジョン・ルイスの傘下に入る)も反物・服飾店であった。1856年に開店し2010年に閉店したリバプールのルイス百貨店は、もともと男性服飾店。そして、今でもオクスフォード・ストリートに堂々たる旗艦店を持つセルフリッジ百貨店が開業したのは1909年である。Erika Diane Rappaport の *Shopping for Pleasure* を読むと、ウィスコンシン生まれのアメリカ人、ハリー・ゴードン・セルフリッジが開業したセルフリッジ百貨店での買物体験は、サービスを受ける側にとっての一流の娯楽であったことが見て取れる³⁾。

上記の百貨店の前身を見ていくと、反物専門店や服飾専門店がやがて店舗を広げていった様子がわかる。このプロセスは、衣料の消費拡大の歴史そのものであった。デパートは大規模な既製服生産と大量消費の上に成り立っていたからである。しかし、いったい誰がこの大量生産と消費を支えていたのだろうか

図 1



Thomas Hood "The Song of the Shirt", *Punch*, vol. 5, no. 127, 16 Dec. 1843, p. 260.

か。ミシンの発達に伴って衣服の工業生産が可能となるのは、19世紀後半のことである。つまり、シャツ、帽子、靴、そして女性のドレスの製作は、長い間人の手に頼っていたことになる（実のところ、その現状は今でも変わらない）。都市部では大規模な作業所の確保が難しいため、衣服の生産は下請けの家内労働に頼っていた。出来高払いのそのほとんどを女性たちや年端の行かない子供たちが支えていたのである。これが、いわゆる「苦汁労働 (sweated labour)」と言われる悪名高い労働形態であった。

2. 「シャツの歌」の表象——囚われた女性たち

19世紀にはこの既製の生産の中で搾取される女性たちが絵画や小説の格好のテーマとなっていた。インスピレーションとなったのは、1843年12月16日の『パンチ』誌に載せられたトマス・フッド (Thomas Hood, 1799-1845) の詩、「シャツの歌 (The Song of the Shirt)」である (図1)⁴⁾。この詩にインスピレー

図 2



Richard Redgrave 《The Song of the Shirt》 c.1843, Victoria & Albert Museum.

シオンを得たりチャード・レッドグレイヴ (Richard Redgrave, 1804-1888) はこの「歌」をカンバスやエッチングの銅板に移した (図2)。その後この詩からいくつもの絵画が生み出されるのみならず, 哀れなお針子たちは小説の格好の主人公ともなった⁵⁾。原作の「シャツの歌」は全 11 連からなるが, ここでは最初の 2 連と最後の 3 連を引用する。

指は倦んで、動かない、／まぶたは重く、赤くなる、／ひとりの女が女らしからぬ
ほろをまとめて、／座して針と糸を操っていた——／チクチク！チクチク！チクチ
クと！／貧しく、飢えと汚れの中で、／そして未だに切なる声で／彼女は「シャツ
の歌」を歌っていた。

働け！働け！働け！／遠くで雄鶏が鳴く間！／働け——働け——働け、／星の灯り
が屋根を通して瞬くまで！／ああ！これは奴隷の身／残忍なトルコ人の世界での／
そこでは女の魂は救われない、／でもこれはキリスト教徒の仕事なのだ！

(…)

ああ！ただ吸い込むことができたなら／サクラソウとプリムローズの甘い香りを
 ——／頭上に空、／足元には草地を感じられたら…、／ただ一時間でよいので／昔
 みたいに味わえたら、／欲望の悲しみと食事を求める彷徨を知る前に！

ああ！たった一時間でも！／ほんのわずかな休息を！／愛や希望の祝福された暇で
 なく、／ただ涙にくれる時間が欲しい！／わずかな涙が心を癒す、／でもその塩辛
 さに包まれたなら／涙を止めなくては、なぜなら一滴ごとに／針と糸が止まるか
 ら！

指は倦んで、動かない、／まぶたは重く、赤くなる、／ひとりの女が女らしからぬ
 ぼろをまといて、／座して針と糸を操っていた—／チクチク！チクチク！チクチク
 と！／貧しく、飢えと汚れの中で、／そして未だに切なる声で、／その調べが金持
 ちに届けばいいのに！／彼女は「シャツの歌」を歌っていた！

この詩のインスピレーションとなったのは、1843年10月27日の『タイムズ』紙で報道されたあるニュースであった⁶⁾。「昨日の警察の報告によると、ビデルというみすぼらしい身なりの女性が、汚れて飢えでやせ細った幼児を胸に抱いてランベス・ストリートの刑務所に入れられた」という文章で始まるこの記事は、不幸な事故で夫を失った未亡人ビデルが、2人の子供のためにパンを買おうと、注文を受けて作っていた衣服数点を質に出したかどで逮捕された事件を報告している。警察によると、このような事例は都会では「まったくもって日常茶飯事」であるという。なぜなら、当時のお針子は支給される生地に対して、契約通り衣服に仕立てて返すための補償金を払わなくてはならなかった。雇い主であるタウン・ヒルのモーゼス商会（記事はモーゼスを「ベニスの商人」のシャイロックにたとえている）にビデルが払っていたのは2ポンドという大金であった。ビデルはズボン一着につき7ペンス受け取るのだが、その支払いから糸も買わなくてはならなかったという。そのためにビデルは出来上がった製品をいったん質に入れて、残りの製品を作ることを繰り返して、どうにか食いつないでいたのである。

この報道は1週間後の1843年11月4日に『パンチ』誌に掲載された「飢餓とファッション！（Famine and Fashion!）」の記事の中でも取り上げられた⁷⁾。『タ

イムズ』紙からの引用の後に、『パンチ』は次のように続ける。ここでもモーゼスと同業者たちは、容赦ないシャイロックにたとえられている。

モーゼスと彼の輩はロンドンの道を選びすぐった「安物」（ネツソス〔訳注：ギリシア神話に現れるケンタウロス。その血を塗られた下着は妻を裏切ったヘラクレスを殺すことになった〕のシャツのように血で汚れてはいるが、そこには復讐の力はない）で身を飾って歩くことになると宣言する。そのシャツには、

「7ペンス」

と印が押され、人々は、どうやってこの極上の仕立てものを手に入れたのかを知ることになるのだ！

このような金儲けをたくらむ悪党と食人種を比べてみるとよい。野蛮人は忌まわしい宴を始める前に人を殺すが、古着屋はその残酷さを装って隠し、毎日、衰弱する神経や消耗する筋肉——「心臓に最も近い一ポンドの肉」——を食物にして祝宴を開く。やがて富の神よりも慈悲深い死神が、哀れな者たちの苦しみを終わらせ、教会の慈善が少量の土を同じく土にすぎぬ骸むくろの上に向け、貧民税の受領書を渡して雇い主の良心を鎮めるのだ（強調は原文通り）。

同じ記事の中で『パンチ』は「モーゼス商会」という題名の風刺詩を載せて、そこで作られる既制服の数々を揶揄している。「シャツの歌」は、この記事の1か月後に同雑誌に掲載され、ビデルのようなお針子の状況をさらに世間に知らしめたのである。

しかし、その後も状況は好転しなかったようだ。「シャツの歌」を世に出した5年後に『パンチ』にはこの詩のことを覚えているある女性、スーザン・ジョーンズからの手紙が「家で働くお針子、そして救貧院と刑務所でも（"Sempstress at Home, in the Union and at the Goal"）」のタイトルで載せられている⁸⁾。手紙は次のように始まる。

拝啓—フッド氏が貴誌のページで「シャツの歌」を歌っていたことをはっきりと覚えています。ああ、旦那様！ なんとこの歌だったでしょう！ そしてイギリスの人々皆の心の琴線にその歌が触れて、どんなに鳴り響いたことか！ 私たちお針子は考えたものです。たった一つの小さな歌でこの世が自分たちの専横をどれほど恥じ入ることだろうか。その歌詞の数行がどんなにキリスト教徒の同情とやさし

さをこの国の津々浦々にしみわたらせることだろうか。旦那様、魔法のように何千万人という人々をこの奴隷のくびきから解き放ってくれるやさしい歌が。(……)

でもそんなこと、すべて過去のこと。(……)旦那様、政治経済というものがどんなものか私にはよくわかりません。でも、それは貧民に無一文で生きていくことを教える経済学なのだそうですね。そして何千という貧民が毎日その教えを嫌というほど学んでいるということはわかるのです。

屋根裏部屋でシャツを作って生計を立てているこの女性は、今のままの状況では暮らしていけないので、救貧院 (Union) か刑務所 (Penitentiary) に入ることを真剣に考えていると語る。救貧院でも裁縫の仕事が与えられるはずで、一着につき3ペンス半でシャツ作りを請け負っている。つまり、7ペンスの半分の値段である。その中から作り手が受け取ることができるのは1ファージング(4分の1ペンス)である。そんな状況でも、飢えに耐えて屋根裏部屋で必死に働くよりもましである。少なくとも最低限の食と住まいが与えられ、寒さで凍えることもない。今の状態では家賃と食費を支払えば、何も残らない。1ファージングがあれば、お茶ぐらい愉しむことができよう。そんな手紙の最後に彼女はこう付け加えている。「追伸：小さなムネアカヒワを飼っています。それにゼラニウムの花も育てています。聞くところによると救貧院にも刑務所にも持っていくことができないそうです。パンチさん、どうか受け取っていただけないでしょうか。」

19世紀は、服飾業界のみならず、数多くの劣悪な、そしてこのランペスの未亡人ビデルや、スーザン・ジョーンズの例でもわかるように今でいうブラック企業のもとでの「苦汁労働 (sweated labour)」を生み出した。sweating という言葉そのものは、すでにチューダー朝から存在していたが、実際に搾取の状況が問題となったのは、19世紀半ばからである。苦汁労働の代表として挙げられるのは、裁縫師、ドレスメーカー、お針子、帽子の仕立て、そして製靴という当時の衣料関係の製作全般だった。

女性雑誌や広告は、流行を生み出し身に着けるものの消費をあと押しした。19世紀に創設された環境保護団体の一つ、英国鳥類保護協会 (The Royal Society for the Protection of Birds: RSPB) が1889年に発足したきっかけは、まさに、当時社

交に欠かせなかった女性の帽子だった。植民地に生息する極彩色の鳥たちの羽、あるいは生きた鳥そのものがインドやカリブ諸国からイギリスの淑女たちの頭を飾るために輸入されていたのである。当時高まりつつあった動物愛護の精神から RSPB の設立を促したのは、消費者として社交界に身を置くことのできる女性たち自身だった。同じく当時の社交行事、たとえば様々なパーティや結婚式、そして葬式のための衣服をせっせと作り続けていたのは、若い女性たちで、限られた時間内に注文されたものを作り終えねばならず、出来上がったものを納品することで賃金が支払われた。そのために「シャツの歌」が描くように昼夜を徹して働き続けることになったのである。

しかもお針子たちが貧困のあまり、このような状況を知りながらも苦汁労働に飛び込んだわけではないことを、先に紹介した 1843 年 10 月 27 日付の『タイムズ』紙は報じている。ビデルはモーゼス商会の番頭の甘言にまんまと乗ってしまったのだった。「手練れの番頭は、主人のために奴隷のように働くことになる者たちがどうにか生きていくにはお金がどれだけあれば足りるか」の足元を見抜いていた。そのうえで「誠実にせっせと働けば『良い』暮らしが送れると」説き伏せたのである。

「奴隷 (slave)」という言葉は『タイムズ』のビデル事件の報告記事以降、繰り返し使われる言葉となった。「シャツの歌」に刺激されて生み出された数々の絵画は、昔は自由の身だったのに、今は悪徳商人のもとで奴隷として屋根裏に囚われている女性たちの姿を描き出す。例えばアナ・ブランデン (Anna Blunden, 1829-1915) の《ただ一時間でよいので》もそのような一枚である (図 3)。ブランデンはヴィクトリア朝に活躍した女性画家の一人で、ラファエル前派の多大な影響を受けていた。夜を徹して働き、明け方の空を眺めながら、彼女が望むのは、「サクラソウとプリムローズの甘い香りを——／頭上に空、／足元には草地を感じられ」ることである。今は手の届かない昔の日々を思いながら外を見つめる女性の姿は、真実の女性たちから離れ、19 世紀に再三繰り返される囚われの女性のイメージを作り上げていった。

思い起こされるのは、今一人の有名な囚われの女性、1832 年にアルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson, 1809-1892) の詩に描かれた「シャロットの女」で

図 3



Anna Blunden 《The Seamstress》 or 《For Only One Short Hour》
1853, Yale Center for British Art.

あろう (図 4)。ラファエル前派のインスピレーションを掻き立て、多くの絵に描かれたこの女性も手に入らない現実を求めて窓の外に想いを馳せ、終わりのない手仕事の繰り返しに囚われている。10年後に生まれた「シャツの歌」のお針子の前には「シャロットの女」という機織りの女性がいた。「シャツの歌」はこの二人を重ね合わせる媒介となったと言えるだろう。

結局二人の女性は、自らの作り出しているものに殺される運命にあった。ただし違いはある。シャロットの女の呪縛の理由を私たちは知る由もない。しかし少なくともシャロットの女は、死して名を残すことができたということであろう。

3. Slop-shop の台頭と「不運な者 (unfortunate)」としての「墮ちた女性 (fallen women)」の誕生

ヴィクトリア朝の既製服業界は、中流階級の社交を後押ししたのみならず、

図 4



William Holman Hunt 《The Lady of Shalott》c. 1888–1905,
Wadsworth Atheneum.

現在でいうところのファストファッションを生み出した。安物の既製服を意味する slop-clothing という言葉は、OED によると 1802 年から使われ始めている。このような廉価既製服を売る店、slop-shop は、1810 年から使用頻度が増して 1880 年代にピークに達していることがわかる（OED オンライン版 [2024 年 9 月アップデート] のファクトシート [slop-shop の項] より）。

トマス・フッドの「シャツの歌」のモデルとなったビデルを雇っていたモーゼス商会もそんな店の一つであった。長谷部寿女士によると、それまでは廉価服と言えば古着であったが、1830 年代になって、採寸や裁断の技術が統一され、既製服が作られていった。こうして古着商はパターンを使った既製服産業に乗り出して、大成功を収める。その一つがモーゼス商会だった⁹⁾。

こういった廉価既製服の大量生産は、作り手の貧困に拍車をかけた。1843 年の段階でシャツ一着が 7 ペンスだったが、1850 年 3 月の『ノーザン・スター』紙の新聞記事を見ると、このような slop-shop に雇われていたある女性は、

ベストを一枚作るのに、4ペンス（現在のおよそ1ポンド）しか受け取れないこともあった。そして9月13日から10月末までの7週間は1週間平均賃金が1シリング $10\frac{1}{4}$ ペンス、現在の賃金に換算すると約5ポンド70ペンスとなる¹⁰⁾。労働は徹底的に搾取されていたことがわかる。

この状況が、1850年当時の慈善家たちの言葉を借りれば、彼女たちを性的に「墮落した女 (fallen women)」に貶める「社会悪 (social evil)」を生み出したという論理となっていた。1850年代から fallen women と slop-shop の二つはコインの裏と表となり、どちらも「社会悪」を論ずる中で頻繁に使われるようになったのである。

1850年代の初頭に真っ先に批判の矢面に立ったのは、政府そのものだった。その理由は政府がこれらの廉価既製服業を野放しにしていたからではない。まさに都市化と社会の組織化の中で、体制の象徴として制服が大量に発注されたからである。特に陸軍、海軍の制服だが、それ以外にも警察、税関、儀式に要する衣服も苦汁労働の中で製作されていた。この契約と賃金の問題は政府関係者の間でも議論となった¹¹⁾。

1850年代といえば、労働環境のみならず、子供の貧困と児童就労・教育が議論されていた時期でもある。あらためて大人とは区別されるべき「子供」の定義が法律上の年齢と共に確認され、少年刑務所に代わる教育施設が整えられていったのもこの頃だった。1854年には16歳未満の少年犯罪者のための矯正学校法が制定され、1857年には貧困ゆえに少年犯罪者となる可能性のある7歳から14歳未満の子供たちの救済と支援のために実業学校法が制定された。これらの教育機関では、入校者に衣食住と基礎教育が与えられ、職業訓練が行われた。後者の実業学校の1857年時点での受け入れの条件としては、本人が浮浪児 (vagrant) の状態にあり、親が養育責任を果たせないことが挙げられている¹²⁾。

同じく売春と目されて逮捕の対象となる女性たちの条件の一つもまた、vagrancy (浮浪行為) であった。子どもの貧困問題の中で浮浪行為の原因が、劣悪な家庭環境に求められたように、女性たちが身を持ち崩し街頭に立つに至ったのも個人の責任ではないという言説が19世紀に広がっていく。そこで頻繁

に使われるようになった言葉が、unfortunate であった。この言葉は 1803 年が初出だが、OED の定義によれば「貞操、名誉、地位を失った女性、または道徳的に墮落してしまつたとみなされる女性」というかなり限定的な意味で使われていたことがわかる。しかし、「運に見放された」というその本来の意味を考えると、彼女たちの置かれた環境や経済状況が、春をひさいで糊口をしのぐしかない状況にその身を貶めてしまつたのだ、という言外の意味が含まれていたことが理解できる。

このような unfortunate の姿を表現したのは、先に見た絵画や小説など、当時のフィクションの世界であつたわけだが、当の女性たちになり代わって、マスメディアの中で物語を紡ぎ出していたのは、男性たちだつた。「シャツの詩」の作者、トマス・フッドはもちろんのこと、先に挙げたスーザン・ジョーンズの正体は作家・劇作家だつたダグラス・ウィリアム・ジェロルド (Douglas William Jerrold, 1803-1857) だつた。彼女の手紙の追伸で、唯一の友人が小鳥と花というお涙頂戴のくだりを書き入れたのも、劇作家だつたジェロルドの筆がなせる業だつたというわけである。

4. John La Touche と “Another Unfortunate”

貧困ゆえに道を踏み外す女性たちの救済に乗り出した団体の一つが 1856 年設立の Reformatory and Refuge Union である。この団体は、先に述べた子供の貧困と教育問題と同時に、女性たちの貧困を引き起こす「社会悪」に取り組むために設立された。1858 年の初頭から、Union はこの課題に取り組む委員会を作り、身を持ち崩さざるを得なかつた女性たちのための救済施設 (Home) を作るために、ジャーナリズムを通して議論を展開し、注意喚起と募金活動を展開する。

そのような活動のさなか、1858 年 2 月 24 日付の『タイムズ』紙に「社会の巨悪 (The Great Social Evil)」の見出しで、匿名の女性、「今一人の不運な女 (Another Unfortunate)」からの投稿が載せられた¹³⁾。長文の手紙の書き出しを見ると、“Unfortunate” という名前での投稿が、『タイムズ』紙にほかにも寄せら

れていたことがわかる。ただし、この女性は、自分がその Unfortunate と異なるのは、彼女が幸せな家庭環境から少しずつ転落していったのに対し、自分は生まれたときから家庭環境に恵まれていなかったという点だと述べる。そのために神の定めた道、つまり道徳観など知りようもない人々の間で暮らさざるを得なかった。そこから投稿者は、自分の両親のこと、13歳で路上に出た（つまり浮浪児となった）こと、15歳で売春を始めたこと、18歳で警察関係者のパトロン（つまり愛人）に出会い、そのためにある程度の教育も受けることができたようになったことなど、これまでのいきさつを淡々と語っていく。しかしそのうちに、彼女は自分と同じような境遇にある女性たちを代表して、次のように問いただすのである。

なぜ高みから、恥を知れと私たちに叫ぶのですか？ 恥とは何かを知らない私たちが、あなたたちの言うところの何を恥じるべきなのでしょう？ こう聞くのは、差し出がましいことではないと思います。あなたやあなたの警察の方々にも聞きたいのです。なぜそこに立って、涼しい顔で道徳を語るのですか？ 道徳とは何でしょうか？ 私たちが知らなかったことに責任を負わせようとするのですか？ 悪いことをやったからといって罰する前に、正しいことは何か教えてください。正しい道へと私たちを導いてください。

この手記を読むと、家庭環境に恵まれない子供たちのための矯正学校や実業学校の設立を促す慈善団体の議論そのものと重なることがわかる。つまりここでは子供の貧困と女性の貧困という二つの問題に一人の女性の口を通して言及するのみならず、そのような子供や女性たち、すなわち vagrant を取り締まる警察という権力そのものが、実は売春にも加担しているという隠れた「社会悪」にも暗に触れているのである。

実は、この「今一人の不運な女」の正体は、Reformatory and Refuge Union のメンバーだった、ジョン・ラ・トゥーシュ (John La Touche, 1814-1904) だった。先にも述べたように、Union は子供の貧困と女性の貧困の双方に取り組むことを目標として設立された慈善団体だった。その活動の骨子が「今一人の不運な女」の言説に流れ込んでいたのである。

のちに、ラ・トゥーシュは、自ら運営に関わった女性の貧困救済組織、Female Mission Society（1858年設立）のために書いた小冊子、『ロンドンの罪と哀しみ（*The Sins and Sorrows of London*）』（1862年）の中で、自分が“Another Unfortunate”の正体であることを明かしている。現在は、美術評論家で社会批評家だったジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900）の悲劇的な恋愛の対象となったローズ・ラ・トゥーシュの父親として言及されるにすぎないジョン・ラ・トゥーシュであるが、アイルランドの名家であり、敬虔なクリスチャンであったラ・トゥーシュ家は代々数々の福祉活動を展開し支援していたことでも知られる慈善家の家系であった。そのDNAは1844年にラ・トゥーシュ家の当主となったジョンの中にも流れ込んでいた¹⁴⁾。その活動の特徴は、自ら多くの女性たちとじかに話し、手紙を交換し、時に彼女たちの孤独な死の床にも付き添うという現場主義であることをラ・トゥーシュは強調する。“Another Unfortunate”の存在はフィクションではあるが、以下の『ロンドンの罪と哀しみ』からの引用が示すように、直接の交流から生まれたものなのである。

目撃した悲惨な場面の詳細に立ち入ることはしないし、墮落した女性たちの口から聞き、彼女たちの何百通もの手紙で読んだ心痛むような罪と哀しみの物語を語るつもりもない。ただ、次のことだけは言っておこう。かつては富とりっぱな地位という贅沢に囲まれていた人々が、最終的に極度の貧困に陥るのを見てきた、と。「人生という物語から必死に」逃げ、逃避と休息に身を任せようとして自己破滅の際にある絶望的な罪人に会ったことがある、と。純潔な日々の記憶のただ中で、心から愛し信じた者のためにすべてを捨てた人々の苦悩を見てきた、と。そして彼女らの心に初めて真に見捨てられ、忘れ去られ、失われたのだ！という苦い認識が訪れたときの嘆きの涙を記憶している、と。私は暗く陰鬱な屋根裏部屋で、後悔の念が重くのしかかる死の床の傍らに座してきた。過去の記憶が魔物のように蘇り、苦しむ者をさらに苦しめるのを見てきた。そして「日々冷たく絶え間なく滴る雫のように記憶が彼女の心を蝕む」さまを見てきた。そしてこれらの一人ひとりに、私は慰めの言葉をかけ、救いの手を差し伸べてきた。¹⁵⁾

5. Anti-Slop-Shop League の設立と戦略

ラ・トゥーシュは女性救済のために数々の慈善団体に関わったが、主要な設立メンバーとなった団体が slop-shop に反対する「廉価既製服業者反対同盟 (Anti-Slop-Shop League)」であった。同盟は 1858 年に設立されたと思われる。4 月 10 日付の『イズリントン・ガゼット』紙は、同盟がラ・トゥーシュの家で会合を開いたことを報告している¹⁶⁾。同盟の趣旨では、廉価既製服を作る労働環境と賃金体系が、女性を街頭に立つしかない状況に追い込んでいる点が指摘され、健全な職と賃金を保証する既製服製造店の設立を目指す目標が語られている。

注目に値するのは、同盟の具体的な戦法であろう。単に慈善活動を展開するのみならず廉価既製服販売業者と同じ土俵に立って戦うことで、女性たちに正当な職を与えようとしたのである。つまり、新たな職を女性たちに与えたり、技術を教えたりするのではなく、すでに彼女たちが身に着けていた技術が正当に評価される方向にこそ活路を見出したのである。そのための新しい廉価既製服製造販売業の展開に際して、同盟は以下の目標を掲げた。

- 第 1. 現在の悪質な「スロッピング・システム」と直接かつオープンな競争を展開し、既存の業者と全く同じ価格で一般に向けて販売し、労働者に正当な賃金を保証することによって、(いわゆる)「安価」が販売業者にとっての利益と、被雇用者にとっての公正と正義と両立しないものではないことを、実質的に証明すること。
- 第 2. 労働者に直接雇用のみを与えることによって、悪質極まる「中抜き」システムを廃止すること。
- 第 3. 個々の店による価格表を毎週または毎月公表し、そのような価格が保証する賃金の割合を示すことによって、国民の注目と共感を明確に喚起し、世論の後ろ盾を得たうえで、「廉価既製服業者」たちにその労賃を一般の生活水準に見合うように引き上げさせること。

これらはまさに現在のフェアトレードの国内版とも言えるものだった。この考えが新機軸だったことは、同盟の趣旨が発表されると、その取り組みは大きな消費システムの前にはとても太刀打ちできないと述べる批判もすぐに寄せら

れていることから想像がつく。

おわりに

実際にラ・トゥーシュたちの試みが実現したのかどうかは残念ながら記録が残っていない。おそらく運営はうまくいかなかったのだろう。その試みに寄せられた批判が予見していたように、ラ・トゥーシュたちの目標はしよせん商売というものを実地で経験してこなかった素人の理想に過ぎなかった。それだけではない。すでにミシンが人の手に取って代わろうとしていた。1858年4月19日付の『スタンダード』紙の記事は、Anti-Slop-Shop Leagueの設立趣旨の意義は認めながらも、業界に対抗しようとする試みを批判する中で、以下のように書いている。「革命が速やかに進んでいる。そして針はミシンに太刀打ちできない。いまだにその性能は十分とは言えないものの、力織機が機織り職人に取って代わったように、もっとも素早い運指と忍耐力を持つお針子たちをミシンがしのぐことは間違いない。」¹⁷⁾

その後廉価既製服業者反対同盟がてこ入れした女性たちの救済施設、トリニティ・ホームも1860年にはその運営から手を引いていることから¹⁸⁾、同盟そのものも活動を停止したものと思われる。1840年代後半に起こったじゃがいも飢饉のあおりを受けてラ・トゥーシュ家も経済的に打撃を受け、アイルランド銀行の貯蓄を失ったこともその理由の一つだったのかもしれない。しかし、ラ・トゥーシュが関わったFemale Mission Societyは、夜回りをはじめ、女性たちの相談、しかるべき施設への紹介など、他団体とのネットワークを構築していることから、同盟の活動は、ほかの団体の活動へと引き継がれていった可能性はある。

ラ・トゥーシュたちの展開した議論と活動が実を結び、特別委員会が設置され苦汁労働の見直しが始まったのは1888年からであった。しかし最低賃金の議論がようやく本格的になるには20世紀の到来を待たなければならなかった。1906年に宗派や党派を超えた非政治的機関、National Anti-Sweating Leagueができることで、賃金問題が全国的に議論されるようになり¹⁹⁾、1918年の

Temporary Regulation Act によって労働者階級に対する実質的な最低賃金が制定された²⁰⁾。同盟の活動から半世紀もの時間を要したのである。

もう一つの大きな課題があった。それは 19 世紀の slop-shop をめぐる言説の中に埋もれた真の当事者の声である。彼女たちが自分の口で語り、手を携え、ネットワークを結ぶときに、初めて問題解決の道が示されたと言える。最低賃金を確保する運動の中で強固なつながりも築かれていった。1874 年に設立された Women's Trade Union League は National Anti-Sweating League の主要メンバーを提供した。1906 年に創立した Women's Labour League は独立労働党と労働党と組んで女性たちの地位の向上に努めた。

19 世紀の半ばに始まった廉価既製服業者反対運動を、私たちの衣料消費の問題につなげて見直すことは十分に意義があるだろう。現場の不可視化は今も同じである。slop-shop の作業場が海外に移り、私たちの目からは見えない現代において、問題はより大きいとも言える。98% もの衣服を海外のだれがどこでどのような環境のもとで作っているのだろう²¹⁾。今一度、19 世紀の議論に耳を傾けることには、大いに意味があるのではないだろうか。

注

- 1) 環境省「サステナブルファッション」, https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/ (閲覧日: 2024 年 6 月 20 日)。
- 2) たとえば Beth Harris, ed., *Famine and Fashion: Needlewomen in the Nineteenth Century* (Routledge, 2005) では、イギリス、アメリカ、カナダにおける 19 世紀のお針子の状況を絵画や文学、教育、法律、ジェンダーの各論点から 15 名の研究者が議論している。苦汁労働と賃金体系については、以下を参照。Fran Abrams, *Below the Breadline: Living on the Minimum Wage* (Profile Books, 2002); Sheila Blackburn, *A Fair Day's Wage for a Fair Day's Work?: Sweated Labour and the Origins of Minimum Wage Legislation in Britain* (Ashgate Publishing, 2007)。ヴィクトリア朝の服飾文化については以下の和書が詳しい。長谷部寿女士『ファッションとテクノロジー: 英国ヴィクトリア朝ミドルクラスの衣生活の変容』(春風社, 2021 年)。
- 3) Erika Diane Rappaport, *Shopping for Pleasure: Women in the Making of London's West End* (Princeton UP, 2000), Chapter 5. (佐藤蘭香・成田美美・菅靖子監訳『お買い物は楽しむため——近現代イギリスの消費文化とジェンダー』[彩流社, 2020 年], 233-284)。

- 4) Thomas Hood, “The Song of the Shirt”, *Punch*, vol. 5, no. 127, 16 Dec. 1843, p. 260.
- 5) 以下を参照。Lynn Mae Alexander, *Women, Work and Representation: Needlewomen in Victorian Art and Literature* (Ohio University Press, 2003).
- 6) “London, Friday, October 27, 1843”, *The Times*, 27 Oct. 1843, p.4.
- 7) “Famine and Fashion!” *Punch*, vol. 5, no. 121, 4 Nov. 1843, p. 203.
- 8) Susan Jones [Douglas Jerrold], “The Sempstress at Home, in the Union and the Gaol”, *Punch*, vol. 15, no. 377, 30 Sept. 1848, p. 140.
- 9) 長谷部, 178-179.
- 10) “Distressed Condition of Journeyman Tailors”, *The Northern Star* [1838], 9 Mar. 1850.
- 11) たとえば以下の記事を参照。“We have much satisfaction in perceiving that the disclosures contained in the letters of our Metropolitan Correspondent (…)", *The Morning Chronicle*, 14 Mar. 1850. この記事の中で、筆者は「英国政府は廉価既製服業者の苦汁労働を引き起こしている共犯者だ」と批判している。
- 12) 以下を参照。横山千晶「チャリティ・教育・法律——ソーシャル・ネットワークの中のモリス商会」『*a+a 美術研究*』15号 (2024), 28-45.
- 13) “The Great Social Evil”, *The Times*, 24 Feb. 1858, p. 12.
- 14) ラ・トゥーシュ家については以下を参照。Michael McGinley, *The La Touche Family in Ireland* (The La Touche Legacy Committee, 2004).
- 15) John La Touche, *The Sins and Sorrows of London* (James Nisbet & Co., 1862), 4-6.
- 16) “The Social Evil and the Slop-Shop”, *The Islington Gazette*, 10 Apr. 1858, p. 3.
- 17) “The Social Evil and the Slop Shop”, *The Standard*, 19 Apr. 1858, p. 2.
- 18) “Social Evil”, *Dumfries and Galloway Standard*, 9 May 1860, p. 2.
- 19) Blackburn, 104.
- 20) Blackburn, 177.
- 21) 2013年4月24日のラナ・プラザ崩壊事件を機に、若者たちが開始した運動が Fashion Revolution である。これは、日常私たちが着ている衣服のトレイサビリティ、労働や自然環境への影響などの情報を正しく得る方法を学び合い、フェアで安全な労働環境と公正な消費行動を促す世界規模の運動であり、日本にも支部がある。この運動のキーワードの一つは“Who Made My Clothes?”である。https://www.fashionrevolution.org/ を参照。